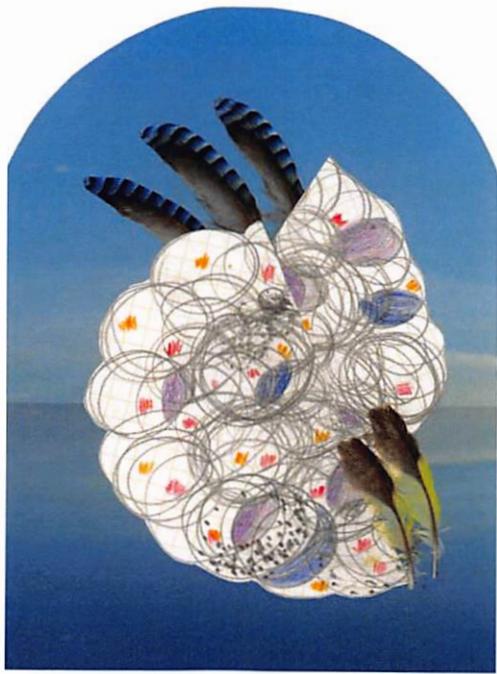


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 1



令和4年1月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第1号

No.764

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化して大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

わたしは消えた

若林美知恵

よし、これで検査結果は異常なし受付番号 460しろまるゲット

ふなふなと眠りの壺にはまりたりつなぎし携帯にぎりたるまま

朝刊に鼻すり寄せて読むふりす心鎮めるわがルーティーン

諸の手を広げ草はら歩む児のみどり濃き影ともに揺れつつ

「この号で最後になります」「固体物は食べられません」住職通信

会いに来よ夢に出で来よ3・11の海に父なる人のつぶやく

抱え来しものにはふれず笑む君と並ぶ部屋ぬちふんわり温し

しあわせな記憶のひとつ母の折りしだまし舟に幾度もだまされしこと

昭和二十三年、広島県福山市生まれ。
平成二十七年、地中海入会。
羊ヶ丘一派所属。

歌集に「逃げ水を斬る」がある。

青黒きあとかさなりて遺りいき惚けし母の自己注射痕

老母より継ぎたる町の洋服屋客の出入りをとんと見かけず
口づけの近さに歯科医のまなこ見ゆ薄目あわててギュッと閉じたり

蟬しぐれ日傘に受けて立ちつくす人間魚雷「回天」の島

耳深く裂けよとばかり蟬が鳴く人影まばらな「回天」の島

顔寄せて寝息いく度もたしかむる余命二ヶ月を告^のられ一年

口開けてあえぐ歯茎にスポットの水を幾たび^{よべ}昨夜も今夜も

アドレスと父の名わが名誕生日続柄も書く何枚も書く

エアコンの風ぞわぞわと走りいてオペ室の前冷えの著けし

ストレッチャーの音ひびくたび顔あげるオペ室より早よ出で来よ父よ

久々にパソコン画面に会う父は訝しげに言う「誰じゃったかのう」

面会を許されざりし三週間父の海馬にわたしは消えた

作品

A

閔 根 榮 子

感 性

・埼

皮さえも昔沢庵に漬けしこと干し柿作りの皮を剥きつつ
この辺り泡立草見ず植え過ぎて消えてゆくこと自然の摂理か
高速道をくぐりて行けば黄金なす稻田となりて人影のなし
見逃しし仲秋の名月この夜はつすぐ雲あり十六夜の月
衰えし感性なりき切れ味の鈍くなりたる刃物のごとく
独りにてホームに入りし友なりし美濃柿のもう届くことなき
慣例の体温測定は五度六分「低いんです」と公民館に入る

閔 根 和 美

湯西川

・埼

ダム三つトンネルいくつに消え果てし廃道の先が谷底に見ゆ
松の木の奥に一樹の燃えいるは胸疼くなりかくれの里に
大ぶりの自然木なるししおどし蟲く池水の底すみとおる
武具甲冑うずめしという平家塚土もりあがり鉄柵のなか
平家ゆばあまた渦巻くその態はほろびの浦の潮を顎たせて
橋のもと下りゆき古き集落の果てに墓所あります伴家との
清盛公しのぶ樹齡の栗の巨樹しみじみ見上げて母のため息

坂 上 直 美

カブール陥落

・天

女たちにまた暗闇がやってくるタリバン侵攻カブール陥落
国家とはただの幻アフガンの元大統領空に消えゆく
飛行機はもう飛び立った地上には振り落とされた亡骸いくつ
放浪の楽師タリバン撃ち殺す「生きる喜びはなくていいのだ」
正義とは?乾いた大地の風に聞け「銃の力」と答えるだろう
そして誰もいなくなつたよ地上には長く続いた戦いの果て
ねえ誰か生きてませんか木々は枯れ砂漠と化したこの地球の上

坂 出 裕 子

コロナ

・洛

いつ果つるとも知れずただひたすらに耐ふるほかなシコロナと熱暑
コロナでも熱暑でもまだ元気なら有難いことなのだけれども
外つ国の子は帰り来ずコロナ下に電話で無事を告ぐるのみなる
三十度超ゆる残暑を告げたれば長袖を着て秋を迎ふと
温暖化なれど地球に向かう側季節は確と回りるるらし
美術館博物館に行けぬ日を図録ながめしばしなぐさむ
外つ国を旅したる日も遠くなり書庫にねむれるトランク三つ

佐藤道子 異変

・甲

鈴木結志

空画連綿

・福

茸の傍に小さき花の苗植ゑぬ森の緑が華やきて来る
猿の軍団今年は見えず猿追ひに子連れの家族が庭を逃げゆく

蝶も蛾も見かけぬ森よ除草剤撒く山荘の多くなり来て

ガラス戸の夜の明かりに誘はれし美しき蛾と日の合ひしこ

この山に蝶は一つも鳴かざりし朝よりミンミンと聞こゆる不思議

椅子に凭り送り火見つめるし夫よ発ちゆく人となりしこの夏

送り火の麻幹は短く燃え尽きぬ夫を見送るこの闇深し

篠原まり子

名残

・羊

真夏日の気温に抗う金木犀つぶらつぶらの花疲れ果て

生け垣に夏の名残をばつねんと存在示す朱色のゴーヤ

零れ落つる銀杏溢る並木道マスクの人等拾うことなし

アフガンの惨状に消ゆる肖像画中村哲は血と汗を残しし

あの歌に想いを寄せた遠き日をひとりし偲ぶジェリー藤尾の死

婚礼に招かれ八十六歳は白いマスクとピンクの爪染

『思川の岸辺』に在りし猫は死ぬ数多を詠まれ幻影の中

柴田登志恵

ガントリークレーン

・天

高津砂千子

サルビア

・風

クレーンは埠頭の端に伸びあがり海のかなたを見はるかす形
みづからは旅せぬクレーン大洋を旅して来たるコンテナを持ち上ぐ
クレーンの頭上飛びゆく飛行機を近頃ほとんど見たことなし
黙すままガントリークレーン日常の物流荷ふパンデミックに
いつからか翼挽がれし人なりきひそやかに動く肩甲骨持つ
かなしみを曳きずるやうにリュック下げ行かねばならぬところへゆきか
クレーンは生きものめきて朝明けの空と海とのあはひを呼吸す

むらさきのブッシュセージの勢いにふれつつゆけり通院の道
しろがねに光るいりこのはらわたと頭をとり除く二時間かけて
「幸福の黄色いハンカチ」思い出す工事現場をめぐる黄の旗
乗り換える駅に降り立ち見わたし大野浦はも友の家あり
降り続しことに朽ちたる山椒とあきらめいしが小さき綠葉
サルビアの三番花のあざやかさわが生まれ日を寿ぎくる
霜月に金木犀の匂いくるこの不思議さはよろこぶべきか

明け初めの静けさ故の余情ともあしたへつなく夢をいとしむ
千両のしづくをすりて初春を「高野切」書の臨書ひたすら
表現の意欲の真意ひとりでに空画連綿の秘め技を練る
生き姿筆にはぐくむ自恃力の限りの技をこよなく満たす
「志定まれば氣さかなり」松陰の言葉尊びおのれを見つむ
伝道師ならぬうた詠み日月を重ねておのがこころをきたう
堅城にあやかる「衆心城を成す」言葉いしじにうた紡ぎゆく

高尾恭子

あなたへ

・大

滝田靖子 呪文

・新

行きたくない行きたくないと毎朝を呪文のやうに唱へて出かける
青天にあればあるほど鬱鬱としてしまふ今日も鬱鬱鬱鬱
鬱の字を幾つもいくつも書きやつと書きが氣が渦むあきらめるまた
異動する三人退職する一人産休の二人定年の二人
看護師は不足してみると幾たびも幾たびも言ふ無駄と知りつつ
霧深き朝の空に上りたるアーバルーンに心ほんのりとする
懐かしい珍しいなど口口に病室にはかに脹やかになる

竹下妙子 春待つ

・霧

雲海のかなたおぼろに聳えゐる神天降たる霧島連峰
わきいづる水のさやけさ三山をしたがへて立つ高千穂のみゆ
動物に冬への毛替へをうながらして朝冷え夜冷え日日に深まる
時連れ生れし秋蝶残り咲く小菊の陰に震へてゐたり
天空のいづこか一羽声鳴けりはるけく今日の命のあるもの
明日のこと分からぬなどと言ひながら今日を生きるて明日も生きたし
人界に住める者らの争ひに閑はらず山ふかぶかと冬に入りゆく

田土成彦

UPA

・宙

鉄橋のトラスに懸かる太陽の草臥れてゐるやうな朱の色

日輪は少しだ大きく見えるゆゑ莊嚴といふ言葉贈らむ

鉄橋のトラスの枠を沈む日はあらがひがたく沈みゆきたり
無精髭伸びてもマスクしてから住みやすき世ぞコロナといふは
無花果の葉陰に百舌の來て鳴けばまだ食べられる実があるらしい
UFOはUPAと呼称変へどうやらほんたうに飛んでるらしい
大閑のワンカップではなく甘酒を一瓶空けて朝の満足

田土才恵 黒枝豆

・宙

交差点駆けゆく少女その脚の刻むリズムの確かなるもの
夜なべして書きし礼状朝一番散歩の道に投函果たす
「数独」の軽く解けたる日曜の朝スマーズに回転始む
ぱつたりと花笠木槿落ち弾ひ足りない子供のように
ささやかに農を楽しむ人となり黒枝豆を提げて現る
ぶつくりと寒のふくらむは育みし自信のひとつようやくの秋
気温の差アップダウンの収まればラ・フランスに秋深みゆく

玉井綾子 口づけ

・羊

口づけが出来ぬコロナ禍二年間 青春期なら人生止まる
マスクする日常生活 成就せぬ口づけを巫女のバイトが結ぶ
コロナ禍に息の上がりし要因をマスク、真夏日、更年期と踏む
頼られず支えも出来ず「同僚」の吾は感染者の埒の外
同僚でいられる残り二ヶ月で忘れられなくなる吾を生ず
朝五時の洗面台は鏡面の汚れをあおり吾に拭かせる
君の目に映らぬように隠し持つビニール傘の使い込まれて

虎谷信子 瞳月

・伴

すずやかなる銃声きたり。睦月たつ 朝ををろがむ。新墾踏みて
田の礼に磨ぐ米 嵩の減りたれど、若水にひたし。心をこめむ
寒の草 衰ふることなく咲きつげり。籠辨のもと 色こもごもに
年明けの川面光れり。ゆりかもめ まろまろとしてここだ群れる
常緑らぬ雨戸を放ち、日を恋へり。睦月の空を つながひ鳥切る
室町は呉服の杜の若葉かげ 呼子笛吹き、鳴き合はせ競る
控へつつ、気遣はれるる面白たち。しこ名も美し。吹雪・風声

中島央子

紫式部

森

萩葉子杖

銀

庭隅のむらさきしきぶ実を結ぶめぐり明るし娘は古稀となる
幽明を迷ひし娘の古稀祝ふ秋の日差しのさいはひにゐる
生きて在るこの尊さをあらためてわが小家族カルパツチヨ食む
玉すだれ白きがこそり空を指す日暮れ散歩の足をはげます
喚声をあげて遊べる子供らの姿の見えず処暑を過ぎしに
祖父言ひき秋の夕焼け鎌をとげ今日の夕空裾渡に染まる
草刈りの済みたる土手に思ひ出す庭草ひきるし白寿の母を

永塚節子 桜並木

銀

こといとく葉を落としたる桜並木幹しらしらと冬の間近き

母逝きて六十九年墓の辺はかの日と同じ秋のひかりに

水桶をたずさえ歩む足裏に富士砂の音さくさく優し

春は春の秋には秋の植栽に墓のめぐりは花絶ゆるなし

背には富士向かいは箱根の峰峰のつらなるここを父は選びき
月ごとの墓参りにはいつも付き添いくれし友も老いたり
満開の桜並木の花の下そぞろに歩く春の待たるる

仲西正子 琉球半夏

沖

道の辺に庭の隅にて雑草と見過ごしてきし琉球半夏

紫の花に出会いてその名知る琉球半夏まぼろしの花

群れもせず身を低くして紫に気高く咲ける琉球半夏

初に会う花こそよけれ紫の琉球半夏かぜに臭えり

また花に会いたきものよ鉢に植え心入れする琉球半夏に

害虫とたき落とししものたちの逃げゆく速さよ土の色して

無農薬はこの手を汚すことなれど生き延びるもの必ずやある

虫の声にさそわれて摘みしみょうがの花 今年さいこのひとつ
「杖ついて出勤した」と息子はいいぬ退院翌日様子を聞けば
蟬の木と名づけた木の下通るときかなかなの声聞こえくるなり
コロナ禍にて束ねていた髪カットして風の中帰る速回りして帰る
ギター弾く兄のかたわらに私いて「乙女の祈り」ききいしあの頃
「残業で遅くなつた」と娘の電話 雨の日風炉のスイッチ点ける
グレープフルーツの青い実が秋晴れの空を向いている

ばかりようこ 魂胆

鹿

朝あさを花よりの使者訪い来て窓辺に芙蓉の大輪一花

琵琶湖にて魚にあらざり人を釣る歌垣に交じらせ酔わせる魂胆

除湿機にたまりし水を流しつつ裡なる汚水も共に流せり

選ばれて生を享けたると今更にしみじみとせし満月の下

おふたりの突然の訪問に惑いつつも 美女と野獸?とし軽口をたたく

美しく滅びるだろう私の事だからと自負 ゆめもまたゆめ

はづきはづか あねさまとしたら きみのばーすでー たおやかなりき べにいろのおくち

浜谷久子 アシダカゲモ

地

いくたびも近づくように降りてくるアシダカゲモを外へと誘う

攻撃と思ふすりと逃げてゆきアシダカゲモの二度と現れず

アシダカは家蜘蛛と知る共生はただひそやかな気配を保つ

傍くも目覚めとともに消える夢見心地の漂うばかり

膝の痛み抱えて暮らす日を届く新孫できるとあらためての声

新しい命の恵みとめどない巡りのなかのひと滴として

祈りつ命を待つ日離れ住む二世代世帯心ひとつに

浜本 芙美

花の精

・夢

藤田 美智子

カシオペア座

・新

冬の街路 家事をこなさん順番を考え乍ら歩むひととき
 自らの歸をそろそろ考えよと寒風が云い冬雲の云う
 さきがけて咲きたる白椿一輪は剪れざり凜然と花の精
 凛として咲きたる椿一輪は風にも雨にも阿ることなし
 弥生半ば今年も友の届くれしケイオウ桜よ幸せを呼べ
 珍しき桜ひとともとに花芽つく映像思いつつ近寄りてゆく
 昼ごはん終われば今日も午後三時この平安をよろこぶべしや

檜垣 美保子

返り花

・昴

ゆうぐれの小路は猫の通う道秋明菊の花ゆるるとき

川土手の桜紅葉の一木は夕陽をはげしくあつめさせびし

ときに声かけあう隣の家の窓朝の音ありうごくかげあり

「いま降りてゆきます」と聞にはの声著けく聞こえふたたび眠る

十月のキリシマツツジの返り花赤ひとつ見え花芽が飛ぶ

曇天に指笛鳴らす人のあり舞いくる鳩の虹色の首

棒状のサボテンに団扇サボテンの綿がれ小さき花のきざしも

福田庸子

曙草

・今

夕映えにひろがる湖は初秋の森をも点す刻をとどめて

木木の間を忘れられたる杣道の長く続きぬ塗みわづかに

草猛る杣道のなか秋陽浴ぶ曙草の点すくみよ

秋風の届く尾根道鳥屋張りて得たる鶴は村の糧なりし

尾根道は育ちすぎたる杉群に光得られぬ歳月を経し

小さき音あげてくだれる沢水のしづかにしみて人去りし村

放置され暗き杉山は獸らの木の実奪ひし村も奪ひぬ

「あんた誰?」初めて伯母に問はれたり深まる秋は記憶をうばふ
 君を待つ午後にあらねど柿の葉の一枚かさりと音立てて散る
 「今ここにゐれば」と「き人の名が挙がり吾に足らざるもの見えくる
 わかつてつもりはつもりにほかならぬ黄昏れ月を雲は隠して
 黙したる君のかたへを歩みつつカシオペア座を目にたどりたり
 しゃりしやりと枯れ葉踏む音立つたびにわが体が浮く少し心も
 「徒長枝も立たねえやうな木ぢやだめだ」要らざる枝とわが思ひしを

藤森巳行

豊科駅・上野駅

・銀

豊科の駅で君待ち大糸線電車デイトは初恋なりき

白襟の制服眩し君眩し豊科高校君は一年

文芸部の交歓会で君と会ふ藤村辰雄を熱く語りぬ

今はもう知らない人が多いかも集団就職ああ上野駅

職安の人連れられ次々と職場へ配達されしと友言ふ

昭和とふ時代と共に消えてゆく集団就職就職列車

妻は言ふあなたは金づる長生きをしてちやうだいがストレスになる

船田清子

やうやくに秋

・天

テレビより?と耳立て聞くに堀の下さやけき三声 ピリリリリリーと

若き日に見上げし深き秋空に逢ひたし今年 雨の九月

東京の金木犀は香り初むと聞くに関西予兆だになく

堀界のわづかなる地面に萩・槿・秋の花々遠慮がちなる

彼岸季たがへすニヨッキリ伸ばしまつ赤な花朧開く一齊

秋彼岸 山頂墓地の読経にし和して声あぐ ツクツクホウシ

いざよひの光に乗りて降りませ君と今宵は歌語りせむ

牧 雄彦

華群

・大

松永智子

あらがひ

・昂

一万羽超ゆる燕が夕暮の池に集ひて餌を求め飛ぶ
池に生ふる葦群の茎撓ませて無数の燕が夜を眠るなり
障害を持つ子病む子はゐないのか南へ渡らむつばめの群に
夕暮れて池の面をあまた燕らの飛び交ひしかど今は静もる
今年巣立ちし子づばめは早や親たちとはるか南の国へ発ちしか
子燕の小さき羽にて海原を越えて幾千里今は飛びゆく
池の面を飛び交ふ燕の姿なくとほくの木々に法師ゼミ鳴く

松浦禎子

十七絃

・羊

横浜の浜べに五万三千坪残しゆきたり 庭の満月
紋付の羽織袴の立ちすがた内園完成茶会の途次に
大師会記念の席に赴くと橋上の三渓百年をすぐ
黒光りする板の間を踏みしめて旧矢の原家炉辺をめぐる
宮城道雄作なるとい「落葉の舞」十七絃の低音に鳴る
若き王女の恋のゆくえをあやぶみて燈明寺塔にかかる満月
燈明寺塔の月影ともないて帰るべき家路いとおしむなり

松瀬トヨ子

月さやか

・沖

孫のやる将棋倒しを手伝へば震へて最初の駒になりさう
猛獸に追ひかけらるる夢に覺む泥土より抜くごとき足なり
樂しみの食事にあれどお互ひに最初はタンパク質と言ひ合ふ
左手にて流れるやうに板書せしマーチン思ふ芒なびけば
頬杖にあづけし頭に浮かび来る名歌ぞこれは右脳がゆらぐ
ベネチアングラスを出せば要らぬとそ独りのワインは湯飲みにしたり
老化なのか栄養良きか長くなる眉ぞ村山富市に似る

宮本靖彦

秋から冬へ

・凌

百房のバナナが生ると妹の声のなめらか「熟れたら送るね」
パン生地をねかせる如く歌の稿再び捏ねてボストへ送る
家々の垣にあふれるアリアケカズラ色明るかり沖縄の夏
前田高地の傾り一面の墓園地燃え咲く彼岸花火薙の匂いす
咳すれば骨がくだける痛みと言うこれが末期か夫のため息
今日明日が山場と告げられその夕べ夫は逝きたり月さやかなり
ある時は君のつぶやく一言に短歌の下りくることありしよ

深まらぬ秋風に早や青唐辛子は緑葉閉ぢて実も未枯れゆく
おのづから百日紅の枝葉を散らし樹下の椿のつぼみの光る
凸凹のある公園のグランドゴルフ球は逃げゆく地球に沿ひて
対面のホームに並ぶ医者看板老人によ小兒科を見す
残暑より初冬に急変この朝吾夏ズボンにダウンを羽織る
高々と黄金の域をひろげたるアメリカン楓野の慈父のこと
今冬の初鍋かきに海老つみれ豆腐白菜鍋に押し合ふ

夜半に覺めさびしき声とし闇にきくおのが声なり遠くなりゆく
夏くればせかざること旅に出でし若き日のわれなに求めしや
外歩きままならぬ身にとほりくるわが旅の声わかき日の声
はるかなる声また夜半にあらずして白き壁また白き天井
夜のふけの甘えごころとみてあればしづかなる音この闇の音
あかときの闇をゆく影ついと消えのち何もなくあけてゆく空
湿疹にまみれしからだ うちがはのささやかなるあらがひとして

三好聖三

雨水

・伊

もとむらしげと

秋の庭

・そ

紙たばこ吹かす片方を上下してカラスアゲハは水を吸いたり
 村はいま小春の日より玉葱の苗おののに立ちてしなやか
 戦略を氣分で決めるこの国の過去あり今あり明日もきっと
 「知の病」とはおよそ無縁の与之助がへらへら笑いへらへら撓う
 死の氣配まとえる猫の背をさすりこのしたやみに座るしまらく
 霜月は燕麦を播く頃合いの土はほどよく雨水を抱く
 朝つゆの残れる草を筆りいるナナ・ムスクーリの声を聴きつつ

御代田澄江

ゆく夏の余熱

・茨

初見聞水戸市の気温三十八度C大気爆発熱中症アラート出づ
 洗濯アイロンしてあげるのは生きてる間だけ言ひつつ口の終の日思ふ
 百日紅散り敷く庭に干す寝具取り込む中に花片を見ぬ
 この夏は冥府へゆきし人多し命永らぶるも先短からむ
 パラ五輪闘ふ選手ら極限の気魄に息のみ只敬服す
 妹の白内障手術前の月ラグビーボール型にて輪郭曖昧と
 妹の白内障手術後月まんまると吾が見る月は精円にて候

茂木誠

水玉草

・埼

日ごろゆく小スーパーもセルフレジ新しければちよつとまごつく
 見返草その咲きぶりの無限花序上位の咲けば秋は来にけり
 宇奈月の山の木陰に咲くといふ水玉草は白き小花に
 淀れ縁に雨戸閉める束の間を腕に来る蚊蚊をはたく
 ノーベル賞の大きな見出し真鍋さん「学べ」とすかさず重ね読みたり
 中の家に及びつかねどわれの祖の車の家なり水車渡世に

山下雅子

怖さ

・習

誰よりも傷つきやすい子のように風に揺れる庭のコスマス
 庭を掃くすがしき音の聞こえくる遠く運動会の花火の音も
 田の神の背に冤政と彫られおりわが家の盛衰を二世紀見けり
 身の廻り何かあればと訴つるボスターに激しき幻滅を抱く
 かさなれる樹木の影のくらきより出で來し君の面のあかるさ
 失敗を激しく悔やむ子らに言う未来を変えれば過去も変わると
 しばしばも実家に寄りいし叔母の声聞かなくなりぬ母逝きしより

八乙女由朗

近辺

・柴

何気なく独りたのしもたまさかにかの日の謂がやたらに生るる
 通い来て与うる時間ありがたし娘らは交互に告げ帰りゆく
 寺繼がぬ子にしあれども皇のご夫妻乗せてかの日飛びたり
 荒れ寺に生まれしわれと違えども皇族抜けしあとの広がり
 生業の沁みたるさまは哀れなり妻の瘦言は真夜を貫く
 夢に顯つ過去世の人らに支えられ妻は寝言に真夜を生きゆく
 かたわらの「月桂冠」をばめぐらせばはやわが子らも停年近し

娘二人生みて育てし若き日あり福岡の町

みちのくに迎えし初春は銀世界いまだ難病に縁なき夫と
 黙しがちなりし姑の偲ばる卒寿超えたる今しみじみと
 もくもくとメモ一枚を探したり深夜にひとりうつつを忘る
 待たざる一時間満更でもあらず待合室に『地中海』読む
 ありのまま心のままに談笑する尊きものの遠のく怖さ
 十年の福島覆う暗雲にチエルノブイリの見え隠れせり

山野幸司 東雲

・沖

横田敏子 霧幻峡谷

・福

・

東雲の田んぼに騒ぐ鳥たちの憧れならん白き鶴飛ぶ
胸一杯吸い込む森の魂を家へと運ぶ秋のたそがれ
どこからも見られない田の稻穂にはバッタ一匹食いつきており
時折に涼やかに吹く風君の胸ただ抱かれるモクセイ香り
稻刈り機時に止まれり草の中ゆっくり進む赤とんぼ見ゆ
稻刈りに追われ追われのカヤネズミ空より狙うハヤブサの影

山本孟 ベースメーカー 大

吉永惟昭

温故晚秋

・熊

ベースメーカー命の源の助け舟明日へ明日へと切つ先進む
心臓にベースメーカーを補ひて南海トラフの大地震に遭ふか
九階の病室に見る月光冠明日退院を祝ふがことく
妻の居ぬ夕餉慣るるも湯気の立つ鍋物消えて久しくなりぬ
追悼の番組亡き人いくたびも生くるテレビの「徹子の部屋」に
九十歳の団地住人いくたりかごみ捨てに来るは一人となりぬ
ガラス戸にうろこ雲あり家ごもある老いの眼に読みさしの本

養学登志子 秋 凌

磯田ひさ子 共犯

・森

かたまりて大き芥のゆづくりといくつかの橋ぐぐりで行けり
上げ汐となりしか先の大ごみと白き何かと戻りて来るのは
朝ゆきしだき芥のかたまりのとまどいながら戻る上げ汐
秋の急ひと日にて今日秋暖簾戸障子たてるにややに手間どる
おいしいと言えば額くひとと居て秋の日差しの控え目となる
無花果の話にはなが咲きまして鳥らや蜂や蟻も加わる
よい声を聴かせる鳥の言つことは喰つてもよいか喰うぞ喰つたで

久々のバスツアーなり「奥会津を巡る旅」へと友と出で立つ
手始めは会津の旨し日本酒の試飲ひと口のみと潤す
只見川第一橋梁渡りゆく電車を眺む撮影スポット
この旅の推しは只見の渡し舟鏡のようなる霧幻峡谷へと
渡し舟に乗りてゆったり進みゆく川面に映る風景の上
青空と山と紅葉と水鏡霧幻の世界にしばしたゆたう
尾瀬沼が水源という只見川ここより遙か日本海まで

納骨を済ませし兄と語らんか神無月尽く温故晚秋
迫りくる宵のまたよし ちちははも在す白黒アルバムの中
かく威張り兄に押させし三輪車 記憶にはなし三歳とある
紐解きの写真は記憶に残ってる撮らぬと拗ねて逃げしことども
支那事変勃発直後召集令父は「なりあがり」主計将校
老兵は祝出征の旗の下 鼻髒だけが様になってる
添え書きの兄の川柳毒舌も艶あるにひとりふふみ笑いす

市原 やよひ りんこ

・萬

奥田 陽子 やもり

・羊

ふるさとの赤きりんご届きたり山は雪との添え書きありて
朝夕の寒さ懷かし温暖な地に住みてより幾年経しや
なかなかに行けぬふるさと偶に映りしテレビ急ぎ録画す
今年また青き空なり文化の日変わることなし晴れの特異日
くもの葉がキラキラ光る秋の日の主は真中に陣取りしまま
病院から帰りし夫は我のうた分かり過ぎると言いて眠れり
桃の木に巻きつくむかご朝夕に拾い集めてご飯に炊けり

梅本 武義 妻の友

・羊

小野 雅子 名前

・羊

カーテンを開ければ今朝もガラス戸を覗き込むかに黄の薔薇が咲く
カーテンに留まる亀虫殺虫剤たっぷり浴びせ戸外へ放つ
妻の友集い仏間は物置きに私は菜園に秋風を聞く
久々の妻の友らへ枝豆を半日かけて我が選り採る
検査する度ごと増える飲み薬朝、昼、夜を足せば九粒
反感の湧きくるロン毛ボニー見てテレビを消すも不信は消えず
黙りゆく香港の民黙らせる中華の恐怖日本にもじわり

大浪 美雪

十三夜

・森

神田 鈴子

秋の日

・大

電灯を点したる時ひつたりと小窓に張りつきやもり動かず
外灯の球形つみ降る雨の音する宵をやもり思える
しきりにも水際の茎の揺れいしが翡翠の背の青そらへ翔ぶ
道端の花梨たわわにみのりいて取る人もなく色づきそめぬ
彼岸花終わりて刈られたる草の匂い立ちくるひかりの中に
来ん年の季節を約すごとくにも彼岸花の葉ついと伸び来る
一斉に散りしは鳥か落葉に似て音もなく水に浮きいる

十五夜を前にし刈らるる薄原せめて栗など蒸してみようか
十三夜の月の光にひたりたく小さき風呂場に灯を消して浴む
夜顔の葉を喰ひつくし雀娥のいもむしいづこに糞のみ残し
「誰が袖」と呟きつくりし藤椅吊り干す部屋のけはひ和らぐ
大粒の雨零こぼす補に何を騒げるも鳥の声
コロナ禍に生まれしをのこ戦事下のわれに重ねて母を思へり
西暦の二千百年にことし子は八十歳となる はるかなるかな

秋の日にその夫送りし悲しみのしづかに滲む文読み返す
逆縁となりて逝きたる子を恋ふる友の哀しみ声もなく聞く
二十余年の闘病の果て逝きし祖母の柩に孫らは手紙を入れぬ
抱かれて愛されし日が還るのか三人の孫の涙はつきず
人の死の三たび続きし秋の日の空の青さが目に沁むばかり
早やばやと喪中葉書の舞ひ込みて寂しさ漂ふ霜月に入る
仄かかる匂ひに夕べ振り向けば銀木犀の小花がのぞく

菊地栄子

霜月の朝

・湾

草刈十郎

菊人形

・世

一夕には読み尽くせない『西行花伝』時間まちまちに夏の夜聞く
墓たかき茗荷のねかたに涼む墓猛暑に籠まるわれはうとます

墓伸びるティカカズラの剪定す家事の順序は出来る事から
拡声器つける如き虫の声今宵むなしく聞き入るばかり

新生のみつ葉を一夜に食い尽くす虫の執念にわれパンチ食う
二日ほどモーター音の鳴り響き松の林は下刈りが済む

長短の時計の針が真直なり起きるに早霜月の朝

北山雪男

秋は舟漕ぎ

・伊

所在なきコロナの秋は取り出だす読みさしの書、若き日の無知
若き日の通過儀礼に欠礼のアルペール・カミュ けふ日気になる
〈海の声〉迫る真昼間 牧水の水から醉へうつら舟漕ぎ
とほつ世の他人事ながら濃く淡く多情啄木、酒情牧水
異国語を学ぶジグザグ ど真中に日本表示の地図傍に避け
知らざりし地名・人名メモしつつ、旅のハングル 行く先は過去
出口なき現に馴れて幾月があきらめ河に自助の舟漕ぐ

木村文子

今年の夏

・羊

春先に枝を払われボプラの木わっさわっさと夏の葉をもやす
はつなつの雨の甘さに促されつきつき開くキユウリの花は
ベランダを故郷としてミニトマト豊作であった今年の夏も
雪はみな東へ向かって流れゆく風に乗りたしたまには我也
風呂あがり炭酸水を飲み干せばわきに生まれる小さな銀河が
あやことは母の決めたる名前なり父はみなこがよかつたと言ひき
言葉より先に飛び出すものたちへ手を伸ばしつつ幼子歩む

國井節子

天道虫

・春

朝露を置きて静けし秋の田の稻穂は折りのかたちに稔る
草に棲む鳥のさへづり虫の声みな透明な声張りあげて
朝焼けの雲ひとつひらの珊瑚色おもく稔りし柿の艶めく
おぼつかぬ動きに草をのぼりつめ天道虫は天へ飛びたつ
庭隅に秋明菊の花咲けば西へ東へ風の吹くまま
夕焼けの置き土産かもからず瓜朱実あまたを宙にさげて
眠られぬ夜更けラジオの深夜便昭和の歌に抱かれてねむる

河野繁子

桜夢

・雁

リハビリの歩行器に添い歩みゆけば荷物を持つと手を出す夫
夫の胸にさくら巡るや水神さんになく咲いたと今日は告げおり
コロナ禍に骨折の夫ままならぬ面会十五分の別れを惜しむ
午後二時より十五分のみ会える院英断なりと耳元に聴く
病得て子にかかる病院の窓より長く手を振り送る
さくらで咲けり夏日の神無月出雲の神に届けと祈る
角まがり風の涼しと友のいう野草の庭のヒゴタイ見せん

小林能子

初冠雪

・羊

久我田鶴子

水の揺らぎ

・羊

とんとんと杖を鳴らして足もとを確かむいざや鹿集積場まで
橡の実の散らばる坂をそろそろそろそろなりなほ鹿集積場まで
建物の間にふかくこの秋の日本の空 紺碧の空

建物の上に広がるいわし雲窓辺に見つづラジオ体操す
山並のかなた淡紅色の今朝の富士

初冠雪が報じられて
足もとにひつそりと咲く野櫻 櫻菊

帰化植物とは謂はず親しむ
花粉症眼鏡に度を入れ水色のフレームはボストン型と洒落れこむ

近藤栄昭

・虹

初乗馬

手庇に望む富士山南南西整い座る爽やかな影

白華せしレンガの壁のひび深しワクチン打ちて安らいでいる

木漏れ日が全身濡らし洗いいる樹下の落ち葉と木の子の匂い

金・金に自爾の鬱のいつか消ゆ選手の元気伝播の速き

断定の言葉づかいの多い歌割れぬ素数の角はそのまま

伸びやかな下生え挿む指の間くすぐられる浜の素足が

初乗馬左右に揺れる鞍の上騎手のギャロップ憧れていた

近藤芳仙

・信

墨文字の「家紋提灯」つるす店コロナ禍の夏益が近づく

人一人逝きたる度にあつらへし家紋提灯いくつ組みたつ

コロナ禍の迎へ盆けふ小止みなき雨に光れる墓石をぬぐふ

十五年前墓に納めし夫の骨亡き義父・母に抱かれをらむ

盆棚の提灯の紋下り藤 桦なしのこと姑の言ひるし

女紋もちて嫁ぎし我が喪服五十年後も五三の桐紋
家分ける印であれば箱や菓子・薬にも押す印紋がある

☆トピック☆

- ・「短歌研究」11月号、「1970年代短歌史」第六回で、吉川宏志氏が「小野茂樹の死 1970年」を六ページにわたって書かれています。①「あの夏の…」の歌はいかにして名歌になったか ②『羊雲離散』と時代との関わり ③小野茂樹の影響
- ・「Tri」短歌史プロジェクト第8号では、「鳴らないシンバルの向こうに一小野茂樹とマリピエロ」というタイトルで濱松哲朗氏が小野茂樹のエッセイ「愛する時・渴く時」に踏み込んで書かれています。